器と鍛冶した製鉄が共伴し、又筑前国に於いても鉄製穂摘器（石包丁と同型）更に豊前国速見郡大神村真那井に於いては七口の銅鉾に混つて一口の鉄戈が存在する等鉄製遺物の我が国の編年的問題を検討する資料は少しずつ前進している。然し其の起源に就いての資料は未だに少く、この点下城の製鉄址と其の遺物が参考になろうと考えこゝに報告するものである。

註　①拙稿「東九州に於ける彌生式土器」考古学雜誌三十七巻一号
②拙稿「東九州に於ける彌生式中期土器の一形式」―主として大津式土器を中心として―別府大学紀要五輯佐藤鶴氏と共著。
③拙稿「東九州の押型土器」考古学雜誌三十七巻一号
④坂本経堯氏「肥後に於ける製鉄址の研究」

資料紹介

下毛郡耶馬溪村下郷雲八幡宮　川太郎（カツパ）祭の祭文

惟今奏し奉る音楽の由来を語り申すに昔は源平の両家軍の輪の如く鳥の左右の翼の如くにして、国々を守護し奉りぬ。然るに保元年中に六条の判官源の爲義討たれ、平治元年に左馬頭源義朝討たれ源氏悉く滅び給い、安芸の守平清盛、世を取りて二十余年一門の榮華盛んなりしに、治承四年の頃故左馬守義朝の三男右兵衛の佐頼朝、父の敵、一門の敵なれば平家をほろぼさんとして、伊豆の国にて旗を挙げ、関東八ケ国を討ち従え、舎弟蒲の冠者範頼、九郎判官義経と両大將として東国の大勢都を指して攻め上り、平家都にて防ぎ戦わんとし給う処に、頼朝の従弟に木曽の冠者義仲と云う者あり。信濃の国より討つて出で、北陸道の大勢を催し、即時に都を攻め破れば、平家の大將宗盛は、安徳天皇並に三種の神器をとり奉り、一門残らずお供し、西海の浪に漂い給い、摂津の国一の谷に暫く御落着、内裏を造り出し、大手は生田の森に搦手は一の谷に城郭を構え、四国九州の軍兵を相催し、東国の寄手を待ち拾う、蒲の冠者は生田の森を攻め破り、九郎判官義経は鵯越を落して一の谷を攻め破れば、平家の人々力なく又九国に落ち給い、宇佐の大宮司公道を頼み暫し御安堵ありける処に、豊後国の住人緒方三郎維義という者平家を背き奉り、夫より筑前国に落ち給い、原田の大夫、大蔵の種直を御頼みあつて大宰府に詣で給いしに、又緒方三郎追出し奉り、それより山鹿兵頭次秀遠を頼み給い四国をさして落ち給う。阿波の民部重義御味方にまいつて、讃岐の国八島と云う処に御落着、かたの方く内裏を造つて暫し御安堵ありける処に、又九郎義経押しよせ内裏に火の掛け奉れば、平家の一門力なく筑紫の方に落ち給う、義経しきりに攻めければ長門国赤間が関にて二位の尼安徳天皇を抱き奉り、海底に沈み給えば、今はこれまでとて、一門の面々手に手を取り合冠つて海中に入り給う。

相残つたる一門は九国の地に上り給う、蒲の者範頼九州に討ち入つて攻めければ、筑後国高良山にとり登り、一夜參籠し管弦をなし給う処に、範頼の侍大將下川部庄司行平、溢谷庄司重国という者、数多の牛を集めてその角に松前を結いつけ高良山に攻め登れば平家の人々胆をつぶし皆山下に落ち給う。案内は知り給はず、筑後川のさはかり深き処に一人も残らず沈み給い、底のもくずとなり給う。その亡念は絶えやらず河伯水神となり給い牛馬に災いをなし給う。筑後の国千代の中村という処より、此の音楽を奏し奉れば水神感に堪え給はらず。ああら面白の音楽やと、おなじく拍子を合せ給う、此の音楽をきくときは諸神天下り給いて、国土安穏人民牛馬六畜に至るまで、壽命長久息災繁昌の音なりと奏し奉る。（中津市　山本入出）